爆豪勝己に成ってたんだが以下略

大仙

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代日本から転生した山田太郎は、爆豪勝己へと成り代わり。しかも何故だか口は悪い、態度はでかい。精神と表面の口が合ってない！合ってないです!!

そりゃ確かに口も悪いし態度もでかいけど中身は違うから！平凡な会社員でもういいから!!えっ？ヴィラン？違います僕は一般人です!!!誰か正しい解答をくれ!!!そして僕に平穏を!!!

――――態度が超速斜め変換されてなんやかんやと勘違いされるかっちゃんの話。

目次

僕のヒーローアカデミア～原作前編～
プロローグ ―― 1
ちょっと修正力働きすぎじゃないですか？ ―― 4
ちょっと君懐きすぎじゃないですか？ ―― 9
ちょっと火力強すぎじゃない？ ―― 15
隠すの上手くないですか？ ―― 22
弱肉強食すぎないですか？ ―― 26
平和ボケはいけません ―― 30
平和ボケしすぎたツケなのですか？ ―― 37
油断大敵という言葉があってだな ―― 44
僕のヒーローアカデミア～原作開始～
帰りは真っ直ぐ帰りましょう ―― 51
夢と現実は混ぜちゃいけません ―― 58
君が救けを求める顔をしてた ―― 64

僕のヒーローアカデミア～原作前編～
プロローグ

話をしよう。

平和で味気ない現代へと産まれおちた赤ん坊は、俗士と同じく何の問題もなく事故もなく、健やかに子供らしく成長した。一次成長期、二次成長期を経て青年へと育った彼は遅く長い思春期を過ぎてから、社会の荒波に揉まれて社会人と成った。新入社員。輝かしい。

社会に希望と期待を膨らませて飛び込んだ青年を待っていたのは、理不尽の数々だった。輝かしい未来は、鬱屈とした未来へと様変わりした。別に何も、全てがすべて楽しくなかったわけではなく。それなりに社会人としての楽しさも在りはしたが、それも大半が苦しみと退屈に埋もれていった。

さて、そんな彼だが。

社会に揉まれ精神削れる日常の中でも彼が楽しみとするところ。即ちそれは創作だった。

異世界、ファンタジー、魔法、不思議、珍妙奇手烈。それらに彼は心惹かれた。現実の日常にない物語。手に汗握るバトル。数多の作品を眺め読んでは彼は物語たちに心踊らせた。そして羨んだ。

自分もこんな日常を送ってみたい。自分が主人公の物語を作りたい。てかちやほやされたい、と。

断言しよう。そんな事は止めておけ、俗士が主人公になってもただ神経磨り減るだけだ、と。

そして個人的な忠告をしよう。睡眠は大事だぞ、あと上司は殴れば

殺れるものだから。

――――――かくして、彼、山田太郎は、爆豪勝己へと成ったのである。

◆

幼児期、というか産まれた瞬間から明確な思考があった。それに違和感を覚えたのは最初だけで、言語を覚えることと身体能力の向上を目指しての運動に気をとられて些末な違和感は鳴りを潜めていった。

だがしかし。幼稚園入園時、鳴りを潜めていた違和感はまたしても表層へと浮かび上がってきた。喉元まで出かかったそれは周囲の子供達の反応から益々加速することとなる。しかしそれは、またしても

些末な違和感だと断じたのは、ある少年と出逢った瞬間であった。

違和感。感じるそれはどうしてもあと一歩というところで出ては来ない。日々の日常の中で膨れ上がるその違和感はじりじりと理性を焦がしていった。

そしてその違和感の正体は、自身が四歳のときに発覚した。

「かっちゃんすげぇ!!」
「爆破の個性だって〜〜」
「かっこいいなぁ!!スゴいなぁかっちゃん!!!」

――――――あ、これ僕のヒーローアカデミアだ。

神は僕を見捨てちゃいなかった。僕のヒーローアカデミアと言えば、大人気だった漫画。途中まで読んだ記憶があるが、それもぼやけて曖昧な記憶しか残っていない。

確か、主人公の幼馴染みで、主人公苛めてて、戦闘センスがすごくて、頭良くて、あと何だかんだと根は真面目だったみみっちい奴で、悪役に誘われたりなんだと色々と大変だった気がするという記憶しかない。

――――――もしかしてこれ、神は死んだ感じかな？

ちょっと修正力働きすぎじゃないですか？

おはようからおそようまで、長年違和感に悩まされてた僕です。爆豪です。

なんと違和感の正体は漫画の世界だということらしく。正体見破ってからは日々平穏な生活は送れていません。

そう、送れていないんですよ。

何故か？

「かっちゃんすっげええ～～！」

「これぐらい、誰でもできる」

まいっちゃうよ～～すごいマズイよこれ～～～。

この口には自動生意気機能でも付いてんのかと思う程に思ったことと正反対のことを喋りやがります。死活問題です。毎日お腹が痛いです。それすらもガン飛ばして喧嘩吹っ掛けてるような雰囲気になりますつらい。

こんな具合で神は死んだ。これで神は生きてるとか宣うのならば直ぐ様に邪神信仰する。

呪いか。嫌がらせか。世界の修正力嘗めてた。生前の二次小説みたいに僕も俺ＴＵＥＥＥＥＥしたい。これじゃ俺ＳＩＮＥＥＥＥＥＥじゃないかふざけるな。

だがしかし、何もかもが無理矢理修正される訳ではないのが救いだった。

◆

緑谷ｓｉｄｅ

ある日、一つのビデオを見た。

「やべーよ！もう十数人は救出してるよぉ!!!やっべーーよぉぉぉぉぉ!!!」

絶望に包まれた炎の中で、その人は白い歯を見せながらその場に不釣り合いな、爽やかな笑顔を見せた。

「もう大丈夫！」

「何故って？」

「私が来た!!!」

僕はその瞬間から、英雄（ヒーロー）に憧れた。

――――それでも、僕の日常の中に、ヒーローはいなかった。
そう、いなかったんだ。

「や～い木偶の坊のデク～!!」
「おまえ無個性なんだってな!!だっせぇー!」

無邪気な子供の心無い罵倒は幼い僕の心を容赦なく切りつける。
それに僕はなにもしないで、ただ踞って、泣いてばかり。

「っ、っひ、ひぐ、っぅえ、ぅわぁあああん!!」
「泣いてやんの!!よわむしデク～!」
「や～い、よわむしよわむし～～!」

「おい」

ぴた、と。僕を詰る子達の声は止んで、不思議に思って座り込んだ膝に埋めていた顔を上げると、そこには男の子がいた。
鋭い赤目に静かに結ばれた口が先の言葉を発したのだと数秒後に気付いた。

「かっちゃん!」
「こいつ!むこせいのデクっていうんだぜ!」
「なんもできない木偶の坊だからデク!な!名案だろ!」

再び始まる罵倒に、ずきずきと心が痛んで、その痛みが目と繋がってるように次々と涙が溢れる。

「どうでもいい」

「……へ？」

間抜けな声は、僕なのか、それとも詰っていた二人の子だったか。

彼は、この幼稚園の中でトップに立っている。個性は勿論、その圧倒的な雰囲気のせいでもあるんだろう。

母さんが言っていた。あんなに小さいのにまるで成熟した大人ね、と。あんまり詳しい意味はわからないが園内に居る誰もが認める超すごい男の子、という認識で、今まではそこまで深い関わりは無かったけれど、こうして近くで見るとよくわかった。

――――この子は、違う。（異質だ）

僕を囲んでいた二人の間を堂々と突き進んで、僕の前に立つ。鋭利に光る緋い瞳が静かに僕を見下ろして、僕は何を言われるのかとビクビクしながら目を瞑った。

「……おい」

「あひゃっ、ひゃい!!?」

落ち着いた声音だった。呼び掛けられて反射的に僕は上を向く。

「……え、」

小さくて白い手。掌を此方に向けて差し出していた。ただ、静かに。じっと此方を見つめて。

「勝己。爆豪勝己。お前は」
「……いずく。緑谷、出久……です」
「じゃあ、出久。俺と遊べ」

真っ直ぐに此方を見据えて言ったもんだから最初は何を言われたのか理解が追い付かなかったけど、数秒後にその言葉を理解して、ただ嬉しくて、涙も引っ込んで、その嬉しさのままに、その手を取った。

――――その日僕は、ヒーロー（かっちゃん）に会った。

ちょっと君懐きすぎじゃないですか？

主人公……出久君との邂逅を果たしてから数ヵ月。あの日を境として出久君は良くも悪くも（多分）友達が僕一人だけという事実が発覚した。

え、ええ何それごめんよ出久君僕と関わったばかりに…。

園内での僕への認識は大方、”悪ガキ”とか”何か怖い子”だと思う。二人だけじゃなんだからと他の子を誘おうとしたら皆様そそくさと散開したからね。別にいいけどさ。……別に、どうってことないさ（泣）

……まぁ、それはともかくとして。

個性の影響かはたまた雰囲気か目付きの悪さも相俟ってか実質今現在の僕の友達は出久君しかいない。

え？出久君とつるむ前はどうだったって？ＨＡＨＡＨＡ決まってるだろぼっちでしたがそれが何か。

だがしかし如何せん物語の主人公。厄介事は他人事でいる内が花だ。これから主人公との親睦を深めていくにつれて、どうしても厄介事に巻き込まれる可能性は高くなるだろう。

熱いバトルシーン？痛いのは嫌いです。

心踊る友情秘話？精神年齢的に付いていけない。

敵とのバトル？死ぬ自信しかない。

こんな感じで不安要素は尽きることがない。

外側から見ていただけの羨望した物語(世界)は、一歩間違えれば即死の危険溢れる現実だった。血が流れれば死ぬし殴られれば当然痛い。原作の様に、いやそれ以上にと渇望した夢(俺TUEEEEEE)は諦めた。

僕は一般人だ。平凡だ。僕の代わりは居るだろう。きっとその子が僕(爆豪勝己)の抜けた穴を埋めてくれる筈だ。

そう考えても、どうしたってこの世界には修正力がある。それに逆らえるのか。仮にその運命(原作)に抗えたとして、そこから先はどうなるのか？悩みは尽きることなく、かといってその悩みを先延ばしにすれば原作通りに歩むことになるのは必須だった。

だから、僕は僕の最高ラインを決めたのだ。

原作には沿う形で、しかしなるべく外野からの後方支援的なものになればいいのさ、と。

◆

緑谷ｓｉｄｅ

かつきくん、ううん、かっちゃんと出会ってから、僕の日常は目まぐるしく変わっていった。

苛めは受けず、殴られたりバカにされることがなくなった。何でだろうと考えたけどそんなの、かっちゃんのお陰だと直ぐにわかった。僕を悪者から守ってくれたかっちゃんは、いつかのビデオで見た、憧れのオールマイトの様で、とってもかっこよくて。

――――いつか、僕もヒーロー（かっちゃん）みたいになりたい。

――――かっちゃんがヒーローになったら、きっとすごく強くて、皆の憧れで、カッコいいんだろうなぁ。

毎日、そんなことを考える。

家から近くの公園でかっちゃんを誘ってヒーローごっこをしたときも、かっちゃんは呆れたような顔だったけど何だかんだと遊んでくれたし、動きだって速くて、僕にできないことを次々と出来ちゃうんだ。

僕が泣いたら、かっちゃんは走って戻ってきてしゃがんで、行くぞ、って僕に手を伸ばしてくれる。それにいつも僕はまたカッコいいなって思うんだ。だから、かっちゃんが困ったときは、僕が助けてあげたい。いっぱい助けてもらったんだもん。僕も、かっちゃんにその

お返しをしたかった。

「かっちゃん、大丈夫？」

小さな小川を繋ぐ、木橋の下で、かっちゃんに向かって手を伸ばす。流れる水は足を冷やしたけれど、頭は心配でいっぱいで、目前にはずぶ濡れのかっちゃんがいた。

足を滑らせて落ちる寸前だった僕を掴んで戻した反動で代わりにかっちゃんが落ちてしまったときは心臓が止まるかと思ったけど、見たところ怪我はないようだった。

「平気だ」

一言呟くようにして吐き出された言葉とともにかっちゃんは膝と地面に手を付いて静かに起き上がった。

伸ばした手は虚しく虚空をさ迷って、数瞬後、何かを埋めるようにぎゅっとシャツを握った。

「そ、そう？よかった～……」

――――なんだかとっても、寂しい気持ちになったのは、どうしてだろう。

濡れた黒いシャツを纏った背中を見ながら、僕は首を傾げた。

◆

爆豪母side

赤ん坊の頃から、静かな子だと常々思っていた。心配で医者に見せたけれど、落ち着きのある物静かな子もいると聞いてほっとしたのを覚えている。

ただ、いつもどこか上の空だという印象はあった。何か、考え事をしている様な雰囲気。

不思議な子だったけれど、愛情を持って育てていくと、段々とこの子のことが分かってきた。

勝己は頭の良い子だった。それ故に、誤解されやすいだけだった。本当は優しくて良い子だけれど、あの子の雰囲気が周囲を遠ざけてしまう、いえ、あれは、遠ざけてる、のかしら？

周囲があの子を孤独にするのなら、私たちだけでも、あの子のことを信じて愛してあげなければいけない。あの子は少し頭が良いだけの、普通の子なのだから。

「勝己ー!・そろそろ行かないと遅刻するわよ!!」

子供部屋を覗くと案の定、居た。支度は終わってるようだが手元をただじっと見つめているのに気付く。なんだか焦げ臭い気がした。近付いて見て、息を呑んだ。

「……ごめん、母さん。壊しちゃった」

そう言うあの子の顔は、今まで見たことない程に、悲しい顔をしていて。堪らなくなって、咄嗟に抱き締めると強く抱き締めすぎたのか痛いよ母さんとくぐもった声が聞こえた。

抱き締めながら強く願う。どうかこの子が悲しい運命を歩まないように、と。

信じてもいない神様とやらに、自分勝手に願った。

ちょっと火力強すぎじゃない？

月日は流れる。原作では確執の原因となったであろう”あの日”を境に変わる筈だった僕と出久君の関係性は今も変わらずのままに成長した。

無個性で何にも出来ないデクと、何でも出来て一番のかっちゃん。

客観的に見てみると、本当に正反対だなと時々思う。だがしかし、それも出久君が高校に進学すれば変化する。

オールマイトからの期待を背に”立派なヒーロー”へと進んでいく。それが原作での出久君だった。筈。

対して僕は？外見がかっちゃんなだけで中身はそこらのモブとなんら変わらない思考の持ち主。褒められれば調子に乗るし傲慢にだってなる。元のかっちゃんの様に強靭なタフネスだって持ち合わせちゃいないし、精神だってそんなに強くない。

これで将来敵に拐われたら、僕はどうなる？

出久君と出会ってから、よく考えるようになったそれはまるで誰かに急かされるように、じりじりと僕の思考を焦がした。考えて考えて、夜遅くまで考えた。最悪の予想が頭をよぎる。敵に拐われたら、もしかしたら、今の僕のままじゃすぐ殺されるのがオチかもしれない。でも、でももしかしたら、案外そうでもないのでは？

甘い考えに誘われるようにこのままなにもしないでいいのか？何かやれることがあるはずだろ？あやふやながら原作を知っているというのは、この世界では未来予知というチートにも近い強いアドバンテージに為りうるのだ。それをみすみす黙って過ごしているのか？活用しなくてどうする？上手く活用すれば、後方支援だって出来る。痛い目にも会わない。良いこと尽くしだった。

例え今が辛くなろうとも、そんなのは自分のやる気、気力次第だ。それに原作では戦闘センス抜群と言われたのだ。大抵のことは軽々こなせる筈だ。

――――思った通り、この身体は何だって出来た。個性も有能で、動きのサポートも出来るようになった。うろ覚えではあったが原作での技も思い出しながら、鍛練する日々。さすが才能マンと云うべきか、原作での技だって出来ていた。まだまだ改善点は多いが、それは独学だから仕方がない、とは言い切れなかった。ビデオを録って、自分で見直す。客観的に見れば、分かるところは多かった。優秀な頭脳に感謝。

爆破の調節も完璧になっていた。爆破の衝撃で空に跳んだ時は色々な意味でドキドキした。あと足は骨折した。痛かったです。すごく。あと光己さんにはめちゃんこ心配された。申し訳ない。

――――爆破、と言われて思い浮かべるのは何だろう？端的に言えば強力か凶悪な力、となるだろう。爆破という能力は、僕の世界でも強い部類として扱われてきた。人物で言えば某錬金術では狂った奴とか、爆破ではないけれどそれに似た事象を引き起こせた無能とかかな。

こうして見ると、手から爆破を引き起こして戦う近距離特化型としか思えない僕の個性は、このままだと後方支援なんて夢のまた夢になってしまうことに先日気づいた。あほか僕。

焦った。大いに焦りましたとも。敵を前にして戦うだなんて、そんなの、怖すぎる。敵にじゃなく、僕自身どうなるのかが怖かった。

……時々、どうしようもなく暴れたくなるときがある。いや、語弊があるかな。正しくいうならば全力を出して戦ってみたいと思うときがあるのだ。それだけではなく鍛練中だって、技の練習をしていればまだまだ俺はイケる。こんなちっぽけなもんじゃない。そんな気持ちになるのだ。

――――――多分、これは、この感情は爆豪勝己本来の、魂の叫び、咆哮だと、本能的に誰に言われるまでもなく感じた。

だからこそ、敵を前にしたとき、僕は自分の意思で敵と相対出来るのか、それが怖かった。存在するかも分からないタフネスの権化のような男に僕の精神は跡形もなく食われてしまうのではなかろうか。そう思って、しまうのだ。

だからこそ、遠距離でなにか技を新しく考えねばならない。近距離めっちゃ怖い。後方支援大事。うん。

そこで考えたのが、汗の使い方だった。なにも手から爆破するだけではない。手ではなく、汗腺から分泌されるニトロを使って爆破しているのだから手から離れたとしてもそのニトロを使えば遠距離爆破も可能では？と僕は考えた。

実際今の僕は汗の中に含まれるニトロの量だって調節できるようになっていた。これなら少量の汗での大爆発も可能、な筈。

＊＊＊

家から遠く。ランニングがてら偶然見つけた小高い丘に僕は居た。ここから眼下には、夕暮れが映え赤色に染まる町の姿があった。大分遠くまで来た。ここら辺には人っ子一人いないことは入念に調べたから大丈夫だろう。誰か怪我する心配もないので思いっきり出来そうだ。

深く深呼吸すると、無意識のうちに口角が鋭く上がっていたのに気が付いて思わず手で押さえる。危ない危ない。テンション上がりすぎたか。

ここまでのランニングの甲斐もあって汗腺は大幅に拡張しているようでめっちゃ汗出てくる。滝のようとはこのことか。すごいな。

個性の影響もあるんだろうけど。
燃え移ったら洒落にならんので草が無く、地面が剥き出しになっている所に移動する。うん、ここら辺で良いかな。
そうやって始めようとした瞬間、僕の目に映ったのは、めっちゃでかい蛾だった。

……くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ!!!!????

蛾である。何で蛾がいるんだ、ふざけるなよここら辺の外灯はもっと上だぞ目の前に来るなぁぁぁあああやめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!（半狂乱）
……ここで分かる通り僕は蛾が嫌いだ。苦手だ。あのフォルムに羽模様、不規則な軌道飛行。全てが恐怖だった。詳しいことはあんまり思い出したくないから却下とする。

鳥肌がたつ。生理的な嫌悪感が襲ってくる。今はもう働かなくなったニート表情筋に感謝した。多分社畜だったら今の僕の顔は酷いものだっただろうから。
何故か向かってくる蛾を必死で避けながら後ろや右へ左へと移動する。僕の顔が明かりそのものとでも云わんばかりに。ぁ～っ、何か今のポエムっぽい。
蛾は数十秒程僕を追いかけるとやっとこさ外灯ではないと判断したのか不規則飛行でふらふらと外灯（本物）に向かっていった。

た、助かった……。

いや正直ここ最近で一番肝が冷えたね。蛾はやっぱり嫌いだな。何はともあれ続きしないと。

先の行動で偶然にも汗は散らばっているだろう。最悪な気分だが好都合ではある。まぁ、失敗しても一回目だしね。これからも研究し続ければ問題はない、だろう、うん。

――――――いざ、爆破ぁ!!!!!!!!

――――昨日未明、……町近くの丘で大規模爆発が起こりました。警察は個性を使った何らかの戦闘痕が残っているとして、事件の可能性があると見て調査を進めています。では、次のニュースを――――――……。

や、やり過ぎたぁ……。

隠すの上手くないですか？

あの子供と出会ったのは、全くの偶然だった。

その日俺は珍しく表に出ていた。それもこれも、偶には外出したらどうか、という仲間の提案から便乗を重ねられ無理矢理外に出された様なもんだったが。

流石に白昼堂々バカな奴等の顔を拝みながら道を歩けはしないので、日が沈み暗くなってきてから人気のない場所へと放り出された。

面倒でしょうがないが黒のフードを深く被って月光の下、林道を歩く。別に何をするわけでもないというのに何故外に出なければならないのか。計画の一部、ならば渋々納得はしそうなものだが今回は只悪ノリをかまされただけな気がする。

――――ぁあくそっ、忌々しい。

苛立ちのままに首を掻くと力が入りすぎたのかガリリ、と皮膚に爪が食い込む。

瞬間、視界の端に、薄香色が通り過ぎた。

――――こんなトコロに人が居んのか。

すぐ林で見えなくなったそれを、好奇心に駆られて追い掛けるように草木を掻き分ける。

見失ってしまうかとも思ったが案外その色の持ち主は少し進んだ場所で立ち止まっていた。

此方に背を向けるようにして立つその背丈からして、少年くらいか。四方に跳ねた活発そうな髪の毛は薄香色で、先見えたのはこれだったのかと妙に残念がっている自分がいることに気がついたが、些細なことだったので頭の隅へと追いやる。

少年が佇んでいたのは、雑木林から少し進んだ場所にある小高い丘だった。走ってきたのかその肩は激しく上下に揺れている。俺は、その少年から何故だか目を離せなかった。なにもない筈だ。たかが五月蝿そうなガキに、何で俺はこんなに興味を惹かれてるんだ？初対面だ。それは間違いなかった。何故なら、こんな異質な奴、一度会ったら忘れられそうにない。

それほどまでに、その少年から感じる雰囲気には違和感があった。まるで熟練の戦士の様な雰囲気のくせに、外見は中学生にも満たない。

――――――異常だ、異質だ。

――――――あいつは、俺と同じだ。

それは、ほの暗い歓喜。

少年は何を思ったのか、ひらりとその身を前後左右に、踊るように、舞うように動き始めた。

一瞬気付かれて、個性発動かと思って身構えたがどうも違うようだ。

少年は楽しそうに、愉しそうに舞う。ちらと見えた緋い瞳は、何処かぼんやりと虚空を見詰めながら。

知らずのうちに緊張していたのか、口内はカラカラで薄縹色に染まった前髪から食い入るように目が離せなかった。

その内ピタ、と静止したその少年は、次の瞬間掌を前に翳すとその状態のままにゆっくり、ゆっくりと地面に向かって下ろしていく。

――――なにか、不味い。

けれど、それ以上にこれから何を起こすのかという好奇心が勝った。

少年が掌を地面に向ける。息を吸う。掌が光る。

――――瞬間。大轟音が辺りに響いた。

呆然とそれを見た。爆発だ。C４以上の爆発だった。土埃が辺りに舞って視界が霞む中で風が吹いた。流れる風に連れて土埃は晴れていった。

少年（バケモノ）は、そこに、変わらずそこに立っていた。

未だ立ち上がる爆炎と煙霧を見上げながら、少年（バケモノ）は愉しそうに、薄く口の端を上げて、嗤っていた。

――――いいな、あいつ。

興味が湧いた。あの、何処か歪な少年に。

帰ったら黒霧に話して、いや、〝あの人〟にも話してみようか。きっと二人とも興味が湧くに違いない。……いややっぱり黒霧はどうだろう。まぁいい。先ずはあの子供のことを調べてみるとするか。

あの少年のことを調べても何ら可笑しなことはない、ということ

なんてない筈だ。あんなに歪(可笑しい)なんだから。

将来、あの少年を仲間にするのも良いかもしれない。今から、というのも手だがそれだと少々手間がかかりすぎるだろう。なら、将来あの少年は此方(ヴィラン)側に来るか賭けてみるのもいい。ゲームは好きだ。きっと楽しめる。もしあの少年が彼方(ヒーロー)側だとしてもそれはそれで楽しめそうだ。完膚なきまでに叩き潰して、再教育してやるのもいいだろう。

爆炎に照らされたかの様な緋い月を見上げながら、俺は踵を返してその場を後にした。込み上げてくる嗤いを隠しながら。

弱肉強食すぎないですか？

走り込みをやっていた為に荒くなっていた息を整えながら滴る汗を乱雑に袖で拭った。暑い。くそ暑い。溶けそう。

扉を開けるとひんやりとした風が頬を撫でていくのを感じて深く息を吐いた。どうやら父母とは入れ違いで帰宅してしまったようで、リビングのテーブル上には出掛ける旨が書かれた母直筆の置き手紙があった。夕飯には帰ってくるようで安心した。ご飯作るのは別に良いんだけどまた外に出て材料調達というのも面倒くさい。きっと帰りついでに買ってくるだろうと信じよう。

テレビをつけると丁度敵（ヴィラン）がヒーローに確保される所だった。辺り一面豪々と炎が上がっているのにも関わらず勇猛果敢に立ち向かい見事な連携で敵を沈めている。

僕はそれをぼーーっと見詰めていた。

――――そもそもに、『個性』とは何なのか。

最近僕のなかで専ら脳内会議の議題として取り上げられる『個性への価値観や見方』。

いつの日からかぐるぐると僕の頭の中を回り巡って戻ってくる『それ』は未だに納得できる解答を見つけ出せていない。一度気になるとどうしても靄が掛かったようで不快になるために僕の精神衛生上大変よろしくなかった。

大変よろしくないのなら気にしなければいい話なのだけれど優秀な頭脳は暇な時間さえあれば一瞬でも『それ』を脳裏から引っ張り出してくるのであるからほとほと困ったもので。

超人社会となった現在は誰もがヒーロー（英雄）に憧れを抱くし、彼等を

信頼する。
正義が悪に勝つ。勝たなければならない。それがヒーローなのだから。
いつの頃からか、ヒーローへの敬意は畏敬に変わり、遂には盲信へと流れ着くのではないか。

『個性』が発現し始めた初期の頃は『個性』に対する法律案を決め世を平定することが最優先事項であり、『個性』が街中で発動されてもそこまで厳重なモノではなかった。それがいつからか『個性』を悪用し、悪事を働こうとする輩が急激に増え続けていった中で現れたヒーローはさぞや輝いて眩しく見えたことだろう。
力弱き者を救い、悪事を働く者には制裁を下す。それは今も昔も変わらずヒーローに求められる。
……確かに、それこそがヒーローだ。何も間違ったことなんかしちゃいない。

只、周りの風潮が良くない。ヒーロー、ヒーロー、私達を救うのが仕事のヒーロー。何で救ってくれなかったんだ、とか、仕事なのだからちゃんと救ってくれ、とよくテレビのインタビューだのインターネットの書き込みで見掛けるが全くもってお門違いな意見ばかりで、前世でのコンビニ経験を思い出して、ヒーローも大変だなと思ったのはここ最近で。
一応ヒーローは公務員として括られる。つまりはそういうことだ。ヒーローだって人間だ。だのに周囲はそれを許さない。ヒーロー自身も。それは、順位が高くなればなるほどに正義と期待にがんじがらめに縛られていくのが分かった。オールマイトなんて、まさしくそう。見てるこっちが辛くなる。人一倍正義感に溢れているからこそ、期待と正義をその背中一つに背負いながら前に進んでいく。休むことなく。

――――――……休んだっていいだろ。彼だって人間じゃないか。

……誰に言うでもないその台詞はきっとこれからも誰に言うでもなく、僕の中だけで呟かれて終わるんだろう。

強い『個性』はヒーローになって、皆を守る。
弱い『個性』は市民になって、ヒーローに憧れる。

分かりやすくて実にシンプル。大いに結構。だが、その思想は他人に押し付けるもんじゃないって分かんないのだろうか。
僕は、……爆豪勝己は『爆破の個性』持ちだ。
そのためか、ずっと「ヒーロー向きの良い個性ね」と言われ続けてきた。言われるのは別に良いけど、強い個性とヒーローが必ずしもイコールで繋がってる訳ではないと声を大にして叫びたかった。
幼馴染みである緑谷出久は、『無個性』。
彼が『無個性』だと知るや否や掌を返したように人が遠ざかっていくのを、僕はただ黙って見ていた。彼も、遠ざかっていく人を繋ぎ止めようとはしなかった。ただ、下を向いてただけで。

――――僕にも『個性』があれば、かっちゃんのこと助けられるんだけどなぁ。

いつの日か、言われた言葉だった。その瞬間、臓腑を焼くような熱さが身体を巡った。身体は熱いけれど、頭は驚くほどに冷えきっていた。

『個性』が強い、弱いで強制的に決められるヒエラルキー。それは、前世でも似たようなモノはあった。

――――それでも『無個性』を引っ括めて全部がお前の個性だろ。

――――――なんで、そんなこと言うんだ。

怒りと悔しさで上がってきた言葉は喉の所でつっかえて、あと一歩と言うところで出ずにはくはくと口を開閉させるだけで終わった。

見てられなかった。『無個性』を与えられた幼馴染みの顔は泣きそうだった。まだ社会にも出てないのに、社会の一端を見てきたようなそんな達観した瞳をさせた世間に怒りを覚えて、どうしようもできない自分が猛烈に悔しかった。

――――――出久は、そのままで充分だ。

充分、君は君らしい。『無個性』込みで君なんだ。

瞳を見て真っ直ぐに伝える。『無個性』は恥じゃない。もっと胸を張れよ。後ろ指指されても堂々としてろ、上にいけば、関係なくなる。

友達の悲しんでる顔は見たくなかった。ただ、どう慰めて励まして良いのかも分からなかった。素直に自分の思ってることをほんの少しの言葉に詰め込むしか方法を知らなかった。

その一連のやり取りから、僕はずっと、考えていた。ヒーローって何なのか。『個性』とは何なのかを。

平和ボケはいけません

春。それは新しいものに巡り会う季節。
桜並木の道は淡い桃色の絨毯が敷かれていて、これを見る度に春だなぁ、と実感が湧く。

折寺中学に入学してからはや一年。二度目の人生といえどもやはり久し振りの中学生活。小学校では何故だかハブられるという悲しい生活だったけれど、中学では中々上手く集団行動出来てると思う。普段はボッチだけれども。

何がいけないんだろうなぁ、僕は普通に接してるしなにか嫌われるような行動も取ってない筈なんだけど。やっぱり目付き悪いからか、そうなのか！
むぅ、と唸って思考の底に沈んでいた僕だったけれど大気が震動したことでその思考は中断せざるを得なかった。

「……！」

煙だ。青い空に不釣り合いな黒煙は違和感しか与えずそれだけで何らかの異常が起きているのだと本能が警告を鳴らす。方角的に出所は……大手ショッピングモールだろうか。なんにせよ、僕が今いる場所からは程遠い場所。彼処の近くにはヒーロー事務所も数個あったから早々に片が付くだろう。

見上げていた顔を前に向き直して、いつの間にか足が止まっていたランニングを再開する。
ここら辺は人が滅多に居ないからトレーニングがやり易くて助かる。良い天気だし、気持ちの良いランニングが出来そうだ。

＊＊＊

なんて、平和ボケしていた数分前の僕を殴りたい。なぁにが良い天気！だ。晴天でも僕の心は今現在、曇後雨霰の台風襲来だわ。

吹き出る悪意を背後に感じながら必死に茂みを掻き分けて前へと進む。前へ前へと思いながらも、そこから先は考えていない。考える余裕もない。恐怖と焦燥。じりじりと精神を焦がす二つの感情のせいでろくな考えが浮かばずに、それがまた精神を追い詰めた。

何か、何かないか……!?

脚を動かしながら周囲へと目を配るも鬱蒼と繁る並木林の中。反撃に使えそうなものは無い。

せめてもの心の支えにと思ったのに何もないとかふざけんな心細すぎるわ。誰に言うでもない罵倒が脳内で飛び交っている中で、背後から”何か”が風を切る音と共に顔の直ぐ真横にあった樹木がバキリと音をたててへこんだ。ついでに僕の髪の毛もちょっと持ってかれたようで視界の端に金色の糸が舞う。

「おーい、待てよ～。そんな必死こいて逃げんなよ～」

殺すのが楽しくなるだろ、下卑た笑いと共に殺気が飛んでくる。怖い。こわい。

樹木に刻まれた裂傷を見るに相手は空気か何かを圧縮したりして操れる類いの『個性』持ちだ。立ち止まるのは愚策。立ち止まるな、走れ、走れ!!

恐怖で硬直していた脚を叱咤しながら転がるように前へと進んだ。なるべく狙いづらい様に軌道を変える。

風を操って斬る『個性』なら、障害物のない拓けた場所に出るのは不味い。それならばまだこの林の中の方が樹木が盾となってくれる。体力は消耗するが、仕方ない。林を掻き分け、飛び、隠れて。そうやって逃げ続けていると、ざわりと空気が揺れたように感じて、背筋が凍った。本能がうるさいほどに脳を刺激する。

「〜〜〜〜……っ!?」

熱さ、からの激しい痛み。やられた。不味い。ヤバイ。すごく痛い。

ジクジク痛む太股を抑えて咄嗟に近くの樹木に身を滑り込ませた。どうやら傷付けられたのは左の様で、結構深く入っている。動けなくなるのは時間の問題だった。

「そろそろ終わりにしようぜぇ〜〜鬼ごっこは飽きてきちまったしよ〜」

意外と声が近い。不味いな、このままだとバッドエンドだ。そうなる前にどうにか、どうにかしないと。

震える腕を強く、強く掴んだ。大丈夫、怖いけど。やれる。何のためのトレーニングだったんだ、この為だろ。歯を食い縛って樹木の陰から飛び出した。気配が後ろから追ってくるのを確認しながら、脚をある場所へと向けて動かした。

目指すは、あの拓けた丘だ。

◆

オールマイトside

久方ぶりに生まれ故郷である日本へと帰って来た。何だかんだとアメリカでは多忙すぎる毎日を送っていたが、やはり国が違っても事件は起こる。

「えー、今現在、△◇県の△◇〇ショッピングモール内で爆発があったとの情報が入りました。被害者からの証言によるとモール内では敵(ヴィラン)が複数暴れているとの――――……」

昼近くに付いたホテルでテレビを付けると、映っていたのは此処からそう遠くない場所にあるショッピングモール内での事件だった。持ってきた荷物を整理していたがそれを放置して、部屋内にあった窓枠に足を掛けた。

＊＊＊

「私が、来た!!!!」
「オールマイト!!?どうしてここに！君今休暇中だったんじゃ、」
「ＨＡＨＡＨＡ！テレビを付けたら丁度此処が映っていてね！居ても立ってもいられなくて駆け付けたと言うわけさ！」

眉間を揉んで肩を大袈裟に落とす旧友を横目に質問を重ねる。先ずは状況把握だが、見たところ他のヒーロー達によって事件はほぼ終着していると見ていいだろう。

「それが、被害者からの情報と捕縛数が合っていなくてね。一名逃走したみたいなんだ。今探知系ヒーローが跡を追ってるけど、もうそろそろ……」
「塚内警部！敵（ヴィラン）を捕捉したとヒーローが！」
「場所は！」
「東南に位置する国立公園内だと！」
「何だと!!?いや、だが確か彼処は人が全くいなかった筈。そう焦ることもないだろうな……、君今は休暇中だろう。この事件は僕たちに任せて君は休みを「ＨＡＨＡＨＡ!!なぁに、私に任せなさい！休暇中だろうとヒーローはヒーローなのだから!!」……って！おぃ……!!」

叫ぶ旧友を尻目に『個性』を脚に発動させて一足で飛び上がった。

何だか嫌な予感がするな。急いだ方がいいのかもしれない。

目指すはあの丘だ。

＊＊＊

コンクリートを数度踏みしめて行くと、あっという間に国立公園内での唯一拓けた丘が見えた。彼処に着地するとしよう。再度跳び上がろうと脚に力を込めた瞬間、視界に一人の少年の姿が映った。

ランニング中なのだろうか、動きやすそうな服装で彼は林の中から転がるように出てきた。何か違和感がある。

よくよく見てみると、少年の太股周辺に赤い染みが出来ているのがチラと見えた。

マズイ！

少年は、敵に既にやられている！

転がるように出てきた少年は太股を引き摺るようにしながらも丘へと走る。その後方からのそりと敵が姿を現したのが見えた。腕を振り上げている。既に『個性』を発動しようとしている!!

このままではやられてしまう。だがしかし今私は空中へと跳び

上がってしまっている。着地まで間に合うか、いや、間に合わせるのだ!!!

空気を蹴って丘へと直進する。間に合え、間に合えと念じて、そして

「――――私が、来た!!!」

風が舞い上がる。着地と共に傍に居た少年の腕を風圧で飛ばされないように掴む。

土煙が舞う中で、此方を見据えて叫ぶ敵に警告するように、そして少年へ宣言するように台詞を叫んだ。

平和ボケしすぎたツケなのですか？

自室の照明に照らされた手をぼんやりと見つめる。何だかすごく長い一日だった。

ベッドの上で仰向けになっていた上体を起こして厚くなった掌から、服の下に包帯を巻かれている太股に視線を移す。

僕は服の上から傷を擦りながら、今日の、長い長い一日を思い出していた。

＊＊＊

「おーる……まい、と……？」

必死こいて逃げ続け、ようやっと目的地の拓けた丘までやってきた、という所で後ろを振り向くと、腕を振り上げ攻撃の態勢に入っている相手を視界に入れた刹那、激しい突風と、繋ぎ止めるような逞しく厚い手に腕を強く掴まれて。

舞い散る砂塵に腕で顔を覆い隠しながらそろりと目を開けると、眼前には、トップヒーローと名高いオールマイトが居た。

あまりの急展開に若干幼い舌足らずな言葉が出てしまったけれ

どどうやら決め台詞で聞こえていなかったようだ。よかった。

ほっと息を吐いていると頭に重み。

何だろうと視線を上に向けて、オールマイトの腕が、視界に映る。オールマイトの、腕？

「もう大丈夫だ少年！よく頑張ったね」

「　　」

混乱。

ぇ、どゆこと。

何故に僕の頭の上に手が置かれて、ぅ、ぉおしかも撫でられとるなんで。

突然の扱いに暫く放心していた意識は、敵の舌打ちによって戻される。マジで何だったんだ。

「良いところでよぉ……態々ナンバーワンヒーローに駆け付けて貰えるとはよっぽど運が良いんだなぁ？タイミング良すぎじゃぁねぇかぁ？……いや、もしかしてこの事を予測してたのかぁ？」

後半、距離が遠いのと敵の声が小さくなったのも相俟ってよく聞こえなかったが敵の怒髪天が爆発しているということだけは分かった。恐すぎる。

この敵、オールマイトが来てもこの調子だということは、どうやら腕っぷしに自信があるようだ。ガタイがでかいってのもあるからだろうか。

「っはぁ!!!」

ストレートの構えで振るった拳の風圧が巨大な竜巻となって敵に迫るが、相手もそう簡単にはやられず両腕を振るって竜巻を霧散さ

せる。それと共に、猛烈な悪寒が僕の身体を駆け巡り、冷や汗が背筋を伝う。オールマイトは？何も感じないのか？

大きな背中は、微動だにしなかった。

咄嗟に、体が動いた。

掴まれていた腕を振り上げ、地面に向ける。本当は倒すことに使うための仕込みだったが今はそれどころではなかった。これで消えてくれれば上々、消えてなくとも爆破で舞う砂塵で軌道は見える筈だ。

爆破、轟音、突風。

「オールマイト!!!!」

「ｓｈｉｔ!!!!そういうことか!!!!すまん少年！少々手荒になるが……!!」

その小さな謝罪に疑問符が浮かび上がるのも束の間、次の瞬間には横に投げ出される形で突き飛ばされる。大きな背中で遮られて見えなかった砂塵が目に入る。舞い散る砂塵が不自然にも斬られている。

やっぱりという思いと、マズイという焦燥。飛ばされた体で景色がゆっくりと見える視界の中、視線をオールマイトに移した瞬間。舞い散る赤が目に入った。

深く入ったのか、勢いよく吹き出す血液に全身が凍り付いたかのような錯覚を覚えた。何故だか眼が熱くて、歯は喰い縛られて。結構近くに居たのか、はたまた吹き出す勢いが強かったのか風向きの影響か。舞い散る赤は数滴僕の顔にもかかる。

「っ!!」

身体を強く打ったみたいで、倒れ込んだ右半分が熱を訴えるのを無視して視線を移してオールマイトが居た場所を見てみると、彼はそこには既にいなかった。あるのは抉れ陥没した地面だけ。瞬間、敵の居た場所から悲鳴が聞こえて音に反応するままに其処を見れば、アッパー姿勢のオールマイトと、上に跳ね上がるような態勢の敵がいた。

半ば上体を起こしていた僕はそのまま硬直。

しかし彼は唖然としている僕に気がつくと血だらけの腕を上げて快活に笑った。

＊＊＊

その後、敵を拘束していた頃に他ヒーローと警察が駆けつけ事件は終息した。

色々な人から災難だったね、だの凄い爆発だったな、だのと口々に言われたがぶっちゃけ色んな事ありすぎて早く帰って寝たかった。勿論、オールマイトには助けてもらってありがとうと伝えたが腕は大丈夫だったろうか。結構痛そうだったな、つか僕も斬られてたんだった。すごく痛かった。何よりも、どうやら深く入りすぎたみたいで筋肉の大事な部分が損傷しているらしく逆に今までよく逃げられたねと驚かれた。

普通に生活をする分には支障はないが、激しい運動はこれから

ずっと控えた方がいいのだと。

――待て、待てよ、これってもしかして

――ものすごいチャンス（脱前線ヒーロー出来る）なんじゃないか？

そのあまりの衝撃に、僕は放心した。周囲にいた人達に促されるままに帰路に付くも、その道中はとても足が重く感じて。

敵はもういないのに、頭のなかは恐怖と焦燥でいっぱいだった。

――今までの努力は？

――関係ない、これで晴れて念願の後援ヒーローになれるだろ？

――そうだ。…けれど、しかし

――大手をふって「僕は足が悪いから」と言い訳も出来るだろ？

――そう、だけれども。なんだか、それは、すごく。……すごく、悔しい気がする。それに、

――怖いのか？原作から外れることが

自問自答だった。けれど、まるでその言葉は――――……。

弾かれるように僕は走り出した。もう何も考えたくなかった。脚を前に出しながら、ひたすらがむしゃらに走って、はしって……？

――――――……あれぇ？

目線を下にずらす。目に入るのは、血が染みて黒く変色したズボン。その下には、傷付けられて包帯が巻かれている筈で、なんなら全速力だって難しい状態の筈で。

――――――……あっれぇ???

訳が分からなくて僕はひたすらに首を傾げつつ、一先ず、と帰路を急いだ。

＊＊＊

以上、回想でした。いやほんとに意味がわからない。もしかしてあのときの救急隊員の言葉は嘘だったのか？

いやでも僕に嘘付いてどうするんだ。意味ないだろ。
何か、よく分からないことが僕の身に起きている。これは間違いない。でもそれってなんだ。
それとも怪我したてで全力疾走出来なくなるのは明日からとか？いや僕何言ってるんだ混乱しすぎだ。

帰宅してからずっとこの調子で、夕飯食べるときも上の空だったからか母さんにも心配されてしまった。けれどそのお陰でか、こんな事になった原因が分かったかもしれない。

油断大敵という言葉があってだな

”個性”とは、超能力だ。

なに言ってんだおめぇと思われることなかれ。超人社会が現実となった今、過去の超能力への羨望と興味、物珍しさは拭い取られて、それは当たり前のものとして世間一般に浸透していった。だからこそ、『ヒーロー』という職が成される。

一般で云う超能力――――……個性とは、親の遺伝子を受け継いで発現する”生まれつき”か、全く何も受け継がず、普通の人である”無個性”のどちらかだ。

”無個性”だろうが”個性持ち”であろうが生まれつきであるということにどちらも変わりない。

そう、どちらも生まれつきで、途中から譲り受けたりだとか、奪ったりだとかは出来ないのだ。

だがしかし、忘れることなかれ。ここは超人社会でありそれこそ億の”個性”が存在するこの世の中では、そんな常識である筈の事も通じはしない。なんてたって超人ばかりなのだから、昔のように常識ばかりで測れないのは当たり前で。

だからこそ、”希望”もあれば”絶望”もあるわけで。

――――――――詰まるところ、僕は今絶賛絶望中である訳で。

じんじんと脚が熱を訴えてくるのを無視して何とか呼吸を整えようと荒くなっていた息を深く吸って吐いて深呼吸。流れ出て顎を伝う汗をタオルで拭いとりながら、休息を取れる憩いの場所へと足を

進めた。

もはやすっかり秋晴が目に付き、紅葉が燃えるように色付くこの季節。既に落ちた紅葉に席を取られていたので軽く払ってどかりと座る。

はぁ～良い天気だなぁ～～～。

本人としては感慨深く秋晴のからっとした青空を見詰めていても、表情はまるで動く気配なし。働く気がないようで何よりだよ表情筋。

いや、やっぱり表面上取り繕った内心などお見通しだとでも云うのか。

結論から言おう。

”個性”が増えた。

何言ってんの？頭大丈夫と思ったそこの人。僕もそう思いたかった。切実に。

いや別に、”個性”が増えたから絶望しているわけではなく。僕としても”個性”二つ持ちってかっけぇーなぁーと思っていた。問題はその”個性”がどういうものかである訳で。

オールマイトとの邂逅を果たしたあの日、体の異変に気がついた僕は、最悪とも言えるその可能性に冷や汗を流したもんだよ。流石に半年も経つと慣れるもんだし、慣らざるを得ないけど。

その日僕は超一級とも言える核爆弾をその身に、なんの覚悟もなしに持たされたのと一緒だった。それからはもう、慎重に慎重を重ねて調節する日々。この時ほど自身のセンスに感謝した日々はないと

思う。少しでも間違えば一気にドカン。うろ覚えの原作知識をフル活用して毎日を過ごした。普通に歩くのさえも少し怖かったくらいだから、生来のビビリも大したものだなと何処か客観的に思ったものだ。今思えばあれ現実逃避だわ。まぁ、その生来のビビリにも心底助けられたと思う点は少なくなかった。

最近では各部位ごとに”個性”の微調整が出来るようになってきている。この調子なら、高校までに間に合いそうではあるが、気を抜いてはいられない。

数多の先人たちの努力の結晶。正義の力。先人たちから譲渡されてきた”個性”――――……

――――『ワンフォーオール』

正しく死亡フラグの権化と言ってもいい。この”個性”は、物語の要であり、軸と言ってもいい。それほど重大なもので、僕なんかが偶然貰って良いものでもなかった、筈、なんだけど。

覚えておいでだろうか。オールマイトとの邂逅に於いて戦闘中、僕は彼の血液を顔に浴びた。数滴ほどで、なんの影響もない筈の。

ここから先はまさしく僕の推測で勝手な妄想だと断じてくれても構わない。

あのとき僕は確かにオールマイトの血液が付いたが、本当に付いただけだったのか？　もしそれが皮膜吸収なら？若しくは、気付かない内に口からでも入ってしまったのか。眼球からならば流石に気が

付くと思うので、これはないだろうな。
記憶を探る限りでは”譲渡したいと思った相手への譲渡が可能になる個性”だったはず。ならばあの時、彼は、オールマイトは、僕に何かを期待してくれたんだろうか。認めてくれたのだろうか。

悩みに悩んだ末の、僕の結論はこうだ。

――――――悩んでいても無駄（疲れるだけだ）だから”個性”を自分自身のモノにしよう、と。

個性申請はちょっと面倒だしゲフン、登録したとしてもその後どうなるか全く分からないためにやっていない。
既に個性持ちの奴がある日突然二つ目の個性が発現しました！と公言しているようなもので、ぶっちゃけ怖いから。最悪な未来ばかりが見えて鳥肌がたって仕方がないのなら、登録しない方が自身の心身ともに幸福だろう。

思考に一区切りつけると同時に腰をあげる。結構考え込んでいたようで、時間帯的にも肌寒くなってきていた。ぶるりと体が震える。
そろそろ帰ろう。腕を擦りながら帰路へと身を翻して、また走り始めた。

というか、もうそろそろ高校決めないとなぁ……。

◆

爆豪光己ｓｉｄｅ

ただいま、と玄関から響く声に今日もホッと胸を撫で下ろす。
息子があの日、事件に巻き込まれ怪我をしたと聞いて帰ってきたときは大変に驚いたものだけれど、あの日からあの子の中で何かが変わった気がして、心配だけれど無理に引き留めず見守る事を決意した。

リビングに響いた開閉音に気が付き、後ろを振り向いておかえりと声を掛けると、無愛想な返事が返ってくるが、今に始まったことじゃないしその後に続く蚊の鳴くようなただいまという言葉に頬が緩んだ。

「勝己。あんた宛てに高校の資料届いてるわよ。机の上置いといたからね」
「ん。……これ」
「そ！あんたヒーロー志望でしょ？だったら雄英行きなさいよ！トップ狙うならそこね！あんたなら推薦いけるかも！」
「……」

あら？と首を傾げる。てっきり鍛えていたのもヒーローになるためのモノだとばかり。余計なことだったかと汗を流していると、息子の闘志に湧く瞳が、上がる口許が見えて考えを改める必要はなさそ

うねと溜め息を吐いた。

そうと決まれば善は急げ、ね。用意するものが多そうだと息子よりも張り切る気持ちが俄然湧いてきて、ならば、と早速夕飯の支度に取り掛かった。

◆

いつの間にか雄英志望で決定していた件。

いや、分かる。原因は分かってるんだ。まさかパンフレットが届いているとは露知らず、帰宅早々に母から差し出されたそれは実際に見てみるとうわすげぇと思うやつであった。写真からして綺麗な校舎に広大な土地。綿密なカリキュラムに豊富な学科。やはり偏差値高いと違うな。すごい。前世が頭悪かった方だけに余計そう思う。

話が脱線した。

まぁ何はともあれと、すげぇなーなんて呑気に見ていたら、学食欄が目に入った。こんなのも載ってるのか。しげしげとその項目を見つめた。

衝撃である。なんじゃこりゃと叫びたかった。

学食が広い。だだっ広い。しかもめっちゃ美味そうなものばか

りである。おっと涎が。

食い入るように見詰めていたところ、ふふふという微かな笑い声で意識が戻って、ハッとなる。

母の満面の笑み。失礼だがゾッとした。この顔のとき大抵自分自身に良くないことが降りかかるので。

ご飯につられていたのを微笑ましく笑われてしまったという仄かな羞恥心と悪寒から、さっさと部屋に戻った。怖すぎる。

そう思った後日、これである。

原作に忠実にいこうと思ってはいるが、雄英に入らなければ巻き込まれる心配もないのでは？という考えのもと、違う公立高校に行こうかと考えていた筈が、母によっていつの間にか外堀が埋められている状態だった。

母よ、あの時どんな思考からこうなった。

しかし、受験してしまったものはしゃーないのである。やるしかない。

沸々と沸き上がる闘志を抑え込みつつ、これから始まるであろう物語と、平穏な未来を思い浮かべた。

僕のヒーローアカデミア～原作開始～
帰りは真っ直ぐ帰りましょう

中学三年。春。
振り返るとあっという間だったこの中学三年。春の麗らかな風に頬を撫でられるまま、天色のグラデーションで彩られた空を見上げた。
周りはいつになく騒々しく、浮き足立った雰囲気の中で一人頬杖をついて窓の向こうを静かに見つめる姿はどう映るだろうか。

間違いなく「あいつボッチじゃね？」である。
誤解しないでほしい。友人と呼べる存在は今現在トイレへと出掛けているだけで決して、決してボッチな訳じゃない。そう頭のなかで一人芝居をしていると、友人が帰ってくると同時に担任も入ってきた。朝のＨＲの鐘がなる。ギリギリだなぁ。
教卓へと辿り着くと今日の予定から雑談、それから進路の事へと話題は移っていった。

「そういえば、ヒーロー志望の奴はどれくらいいるんだ？」

その声と同時に挙げられた手は見渡す限り教室全体で挙げられている。嫌な予感がするその光景を眺めていると後方から不穏なざわめきが聞こえてきた。

「おいおいマジかよ緑谷!!お前無個性の癖にヒーロー志望なのかよ！」
「う、うん……」

やっぱり。予想通りの周囲の反応に思わず目を細めた。
小さな肯定と頷きにまた嘲笑が響く。言われた本人は肩身を狭くして机の上を見詰めていた。原作ではたしか、この後かっちゃんに絡まれる、という展開があった気がするが、生憎ともう本物の爆豪勝己ではないのでノート爆破事件、なんてのはないだろう。そして、爆豪勝己を世間に知らしめ黒歴史とさせたあのヘドロ事件も起こりうる可能性は限りなく低い。極力原作通りにしようとはいえ、誰が好き好んで事件と関わるか。ドマゾじゃないのでさっさと帰ろう。うん。

「勝己?どした?もうＨＲ終わってんぞ」
「おう」

ひら、と眼前で緩く振るわれた掌に面を上げて横に掛けてあった鞄を掴んだ。教室内はもう半数以上が居なくなっており、残るはもう僕と友人、そして緑谷だけ。今日は午前だけで終わりの予定だった。なにせ始業式だし。

帰ったら何しようか、なんて考えながら友人の話に適当に相槌をうつ。この友人、良い奴ではあるんだが如何せん爺婆かと云うくらいに同じ話をするので、最初は真面目に聞いていた僕もこの頃ではへー、ふーんとしか言わなくなった。こんな僕と付き合ってくれている以上良い奴であるのには違いないんだけど。
上の空での相槌は、後ろから呼び掛けられた小さな小さな声によって途切れ、意識はそちらへ向かう。

「ぁ、あの、かっちゃん」
「……」

おずおずと呼び止めるその声に軽く驚きと懐かしさを感じながら、話があるようなので体の正面を幼馴染みへと向ける。隣の友人は僕

が体の向きを変えたことで、緑谷へと気が付いたのか少々ムッとした顔をした。話遮られて気分良くないのは分かるけど少しは取り繕ったほうがいいのではと友人の顔を横目に出久へと向き直り眼で話の催促をする。

彼はわたわたと忙しなく手を動かしながら口を開いた。

「か、かっちゃんはさ……どこの高校志望なの？」

なんだそんなこと、いや、本人にしちゃ大分重要な話なんだよ、ね……？

一先ず雄英を志望していることを伝えると何処と無く彼の周りの空気が震えたのがわかった。ぇ、なにその反応。ちょっと怖い。

どうやら質問はそれだけだったようで、あとは何もなく両者互いに別れの挨拶をして教室を出た。

いやしかし、何だったんだろう。

＊＊＊

友人と駄弁りながら帰る商店街。なんと良いものか！

身ぶり手振りで面白可笑しく話す友人との会話はとても楽しく、帰りたくないなぁなんてことまで考えてしまうほどで。

いやさぁ、だって久し振りなんだもの。幼稚園は言わずもがな、小学校卒業までも友人と呼べる存在がなかった僕だ。話しはするけ

どなんというか、壁があって気安い感じではなかったと断言できる。

それが！今や!!こうして帰り道駄弁りながら歩き、あまつさえ買い食いもしてしまうという!!!!!この進歩!!!!

……あれ、なんでだろ、嬉しいのに何故か涙が出てくる……。

ま、まぁそれはともかくとしてだ。いくら親しい友人とはいえ、これから起こる事件にだけは巻き込まれてほしくはない。だからこそ、こんな楽しい時間ではあるが、寄り道せずにここはさっさと立ち去るのが吉だろう。

そうとなれば、善は急げ。然り気無く彼に商店街を出るように仕向ける。何の疑問を持つことなく歩みを進めていくのを見て内心ホッと息を吐いて、瞬間その脇の路地から聞こえてきた音に小さくビクリと肩が跳ねた。

「――――!!、～～～!、!!?」

なんだろうか。喧嘩？いや、これは……。

嫌な汗が垂れる。

友人もその物音に気が付いて、恐る恐るとその路地を覗き込んだ。その行動に何故か腹の中が混ぜくちゃにされたような違和感。気持ちが悪い。

「っ、かっ、!!」

悪寒がして咄嗟にその子の口を塞いだ。ダメだ。なんか、これは、感じたことのある空気だ。

本能が警鐘を鳴らす。それに従って友人の頭を掴んだまま思いきり後ろに引っ張りその反動で反対側の手を前に出してそのまま爆破させた。その爆破の衝撃で友人諸ともふわりと空中に数瞬漂い、後方へと着地した。

次の瞬間、その路地からは無数の針が射出され、先まで友人の居

た場所付近に深く突き刺さった。あーっとこれは。

ぐちゃり。なにか粘着質なものの音がすると思った。ぬるりとそれは出てきた。

緑色のヘドロ。その隙間から見える〝誰か〟と弧を描いた剥き出しの歯に、ぎょろりと蠢くその瞳は下品な程に歪んでいた。

◆

緑谷　出久ｓｉｄｅ

三年始業式の帰り道、お気に入りの赤いシューズを見つめながらトボトボと歩いていた。

脳裏によぎるのは先程まで居た学校での記憶だった。

『かっちゃんはさ……、どこの高校志望なの？』

何故そんなことを訊いたのかと思われただろう。でも僕は、その問い掛けの意味を話すことなく彼の返答を待った。

小さい頃からのヒーローへの憧れ。それは一朝一夕で諦めきれ

るものではなくて。
無個性と診断されたあの日、僕は社会の理不尽さを知り世の中がどれ程の個性主義で溢れているのかも知ることとなった。
無個性と知った瞬間の彼等の瞳は冷たく見下すものばかり。言葉の暴力は日常茶飯事で心は磨耗していった。傍観する者、嘲笑う者、様子を伺う者。他。
それでも。そんな、周囲からの反応のなかでかっちゃんは小さい頃から何一つ態度を変えることはなかった。
幼少時ならばまだしも、歳を得るにつれて周囲からの反応に敏感になることは誰にだって起こりうる。けれどかっちゃんは、そんな周りの反応に一切の感情を揺らすことなく同じ態度を取り続けた。しかし僕は、逆に堪えきれずにかっちゃんから距離をおいた。
怖かった。これ程まで積み重ねてきた年月が、いつか。壊れてしまうんじゃないかと。
かっちゃんは僕をどう思って接してくれているのか。ある種の信頼を形を、僕は自分勝手な恐怖で壊したのだ。どうしようもなく、僕は弱くて、卑怯者だった。
距離をおいた後も、彼の反応が気になってその動向を眼で追いかけるうち、それが習慣となり観察癖が付いてしまった。まぁ、そこら辺はヒーローノートに役立つので嬉しくはあったけど。

見えない位置で汗が滲む掌を拭いながら彼の返答を待った。この際、どう答えようとも僕には関係なくて、ただ彼が〝返答〟してくれるという事実が欲しかった。
彼は、無個性の癖にヒーロー志望の僕を幻滅しただろうか。嘲笑うだろうか。失笑と共に冷厳な言葉を投げ付けられたら、僕は、
『雄英志望だ。獲るなら、俺はトップに立つ』
言葉をくれた。失笑でもなく、嘲笑いでもなく。僕の目を見て、言葉をくれた。

それでも、その言葉は、今の僕には嬉しくて、でも未来の僕には優しくない言葉で。
こんな、こんなにも。彼と僕との差は歴然としていて。その高い気概は僕には眩しく映った。

彼の隣に立ちたいと、思った。けどそれは、どれ程険しくて厳しいだろう。
幼少期、彼の背中を見続けて思ったそれは今や願いとなりつつある。

――――――だって、僕は

「いーいところに、ガキがいやがるじゃねぇか」
「!!?」

背後から投げ掛けられた声に振り向く前に突然息が苦しくなった。
「む、っぐ、～～～～!!!?」
「いい人質になるぜぇこりゃ。安心しろよ、体乗っ取るだけだからよぉ」

じたばたと暴れる手足はいとも容易く封じられて息が出来ずに、意識は遠くなる一方で。
脳を埋め尽くす助けて、苦しい、の言葉の羅列。

意識が飛ぶ寸前、ぼやける視界に映ったのは、金髪の、

夢と現実は混ぜちゃいけません

「――――!!――――ぃ!!」
　ぼやけ霞がかった暗闇の底で、何処からか音が響いてくる。
　遠くから響くその声はどこか、記憶の片隅に残っていた聞き覚えのある声で、何故だか安心した。
　漂う思考の海の中から声のする方へと浮かんでいく。
　濃藍から淡青色へと薄みがかっていくのを感じながら背中を押されるように海面へと押し出された意識は、頬への痛みと共に覚醒した。
「――――Hey!少年!目ぇ覚めたかい!!」
　太陽を背にした逆光から姿形だけは明確に分かるその濃い線は言ってはなんだが『画風が違う』。それにこの声……何処かで聴いたことがあるような………?
　覚醒から数秒、眼前に屈むその人物に有り得ないと数少ない冷静な理性が叫ぶが、そのシルエットは間違いない、テープが擦りきれるほど何度も見返して幼少からの記憶に鮮烈に焼き付いている彼は、
「オールマイト!!??」
「HAHAHA!!!そのとーり!!」
　太く逞しいその声音は鼓膜の底を奮わせて響く。本物だ。
　本物の、オールマイト!!
　それからは何を話したのか、詳しく覚えていない。興奮のままに喋っていたのは覚えているんだけど。そして、長年愛用のノートに、直筆のサインを貰ったことも。
　何を話したのかは覚えていないが、幼少期のあの日から、僕は彼に聞きたかったことがあることを思い出していた。その答えを聞くまでは、僕は引けなかった。「引いてはいけない、此処で聞くのだ」と

本能が五月蝿く訴えてくる。だから、彼がそのまま焦って何処かへ行こうとした時咄嗟に足に捕まってしまったのは、僕の理性が「しまった」と思う前だった。
「Ｈｅｙｈｅｙｈｅｙ!!?何やってるんだ少年!?」
「す、すみましぇ、……!!勝手に付いてきてしまっひぇ……!!でも、どうし、ても……!!聞きたいことが、ある、ん、です!!!」
吹き荒れる風で髪を後ろに引っ張られ口も満足に聞けない状況の中で、強風に負けないくらい大きな声を腹の底から捻り出す。叫ぶと同時に、しがみついた指に更に力を込めた。
近くの建物の屋上に危うげなく着地して何とか息を吐く。
興奮か緊張か、はたまた恐怖にか。小刻みに震える掌を固く握りしめてから口を開こうとした瞬間僕の視界に映ったのは、煙に包まれながらも現れた、金髪の細身の男性。顔は骸骨のように痩せ細っていて頬骨も出ているし目元も落ち窪んで深い影ができていて、その影から覗く藍紫色の鋭い瞳には、身体とは対照的に力強い印象を与えてきた。
「……ぇ、ぇぇぇぇぇぇぇ!!?何か知らない人がいるぅぅぅぅぅぅ!!!??」
堪えきれない驚嘆の気持ちはそのまま喉から飛び出して空気を震わせた。僕の言葉に、眼前の彼は困ったように（？）目尻を下げてから掠れた声で私はオールマイトだ、と。正確には、言おうとして途中で吐血した。
その様子に慌てながらも話を聞いてみると、何でも事件解決時に負った傷らしくその傷のせいでか個性の持続時間も以前よりも遥かに短い時間となってしまったらしい。抉れたようにへこみ縫合痕に沿って走る赤い肌は見ていて痛々しく、僕は呆然と立ち尽くしていた。
「……少年」
「ひゃ、ひゃいっ!!?」
「何か、聞きたいことがあると言っていたが……。私に聞きたいこととは何だい？」

「あ……、」
そうだった。いきなりの事で忘れていた。
息が詰まり緊張のせいか唾液が大量に分泌される。普段よりも数倍動かしづらく感じる喉を動かして唾を呑み込んだが、余計に緊張が腹の底に蓄積されただけだった。湿る掌を弛く開閉させながら、息を吸って彼を見据える。
「ぼ、僕、ヒーローに小さい頃から憧れてて、それで、ぼく、無個性で、僕は、」
小さい頃から憧れた。大きい掌で高らかに笑いながら人々を救って。皆からは笑顔で名前を呼ばれて、誰もが彼に憧れた。圧倒的な力で敵をやっつけて。
彼みたいになれたら、と。ずっとその思いだった。ずっとその思いを抱き続けてヒーロー観察も続けて。そうすれば。いつか見たあの背中に追い付いて、隣に立てるのだろうかと。
「――――あなたみたいな、ヒーロー（英雄）になれますか？」
沈黙が場を支配する。高層ビルで発生した風がひゅるひゅると響いた。
自分の足元に視線を移して返事を待つが、ほんの少しの沈黙が何時間とも感じる。心臓が嫌な早鐘を打つ中で僕は宣告された。
「……無個性というのはヒーローになる上での大きなデメリットだ。ヒーローという職業上、凶悪な個性を持った敵（ヴィラン）とも戦うことになる。一ヒーローとして、そして一人の大人として言うのならば、君は、〝ヒーローにはなれない〟」
眩暈がする。世界が崩れ落ちていくような錯覚を覚えた。
「だが、ヒーローにはなれずとも〝人を救ける〟職業は他にたくさんある。その心意気があるんだ、君にあった職業を選びなさい。……夢を見続けるのもいいが、相応に現実も見なくてはな。〝ヒーローになる〟だなんて夢は、」
――――わかってる。わかってるんだオールマイト。

――――夢は、所詮夢なんだって。
――――そんなこと、僕が一番わかってた。
点明する意識の中で、様々な感情が芽吹こうとしては枯れていく。死刑宣告は、人生で二度目になるなぁ、なんて。熱くうすらぼやける視界で赤いお気に入りのスニーカーに水滴が落ちるのを眺めながら、僕はオールマイトが静かにその場を去った後も、その場から動けなかった。

＊＊＊

赤く腫らした目元が熱い。また嗚咽と共に溢れてきそうな悲しみを、鼻を啜ることで誤魔化した。あんまり考えないようにと思えば思うほど先の記憶が再生される。一粒溢れ頬を伝ってきた水滴をまた手の甲で拭った。
分かっていたじゃないか。無個性の僕には、無理な夢だったって。
でも、それでも、憧れてしまったのだ。どうしようもなく強くて眩しい存在は、太陽のようで僕は心踊らせて憧れた。僕も、って。
本当は心の底では分かっていたのかもしれない。無個性はヒーローにはなれないと。だから『ヒーローになれる努力』ではない、ヒーロー観察という逃げ道を無意識にとっていたのだろうか。だとしたら、僕はなんて道化だ。なりたいなりたい言っといて、結局諦めて逃げていただけだなんて。
思わず口の端を歪めて自嘲した。
……早く帰って、録っておいたヒーロー特番でも見ようかな。
うん、そうしよう。無理矢理気分を上向きにさせた気持ちで天を仰ぐ。するとそこで、焦げ臭い臭いが鼻についた。
すぐ横通りにある商店街。そこには多くの人だかりが出来てい

て、その人垣の向こうには瓦礫の山と所々燃え上がる炎が揺れていた。
どうやら、長年の癖は消えないようだ。まさか無意識の内に、事件現場に来てしまうなんて。
「……馬鹿じゃないのか、僕……」
一人自嘲めいたように呟きながらも足は商店街へと向かっていく。今まではあんなに心踊らせてヒーロー観察ができたというのに今はノートを取り出す気力さえ湧かなかった。
人と人の間を縫うようにして人だかりの最前列まで行くと、益々現場の凄惨さが伺える。
どうやら、敵が人質をとっているのとその人質が取り込まれまいと暴れているのと、有利な個性を持ったヒーローが居ない為に手を出しあぐねているらしい。遠くから聞こえる爆発音と動く鉄色の流動体の敵を見つめながらヒーローたちが話しているのが聞こえた。
「……!あれって……!!」
あの敵、あの時の奴だ！
だけどどうしてだ？彼奴はあの時、オールマイトが確かにペットボトルに詰めて捕まえていた筈。なら、どこかで……あっ。
甦るのは、屋上を伝っていくオールマイトの足に必死で捕まっていたこと。ここに彼奴がいるということは、移動していたことも含めてあの時しかない。ということは、これって、僕のせいで――――……？
「くそっ、早くしねぇと！人質の中学生がもたないぞ！」
「今応援呼んでる!!」
中学生?!僕と同じ……!?
鼻を塞がれて呼吸も儘ならなかったあの苦しみと恐怖を、ずっと耐えているっていうのか!?
あんな苦しい思いを、ずっと……!!?
甦る恐怖と苦しみに思わず両手で口を塞ぐ。僕は一分と持たなかったのに、人質として捕らえられないために、息が苦しい中でもがいているっていうのか！

うねる流動体ヘドロに纏わり浸かれた人質の子へと視線を向ける。遠目からでも分かるもがき様に息が詰まる。そのヘドロの間から見慣れた金糸が垣間見えて目を見開いて、僕は今度こそ、呼吸を忘れた。

「かっちゃん……??!!」

君が救けを求める顔をしてた

爆豪　勝己ｓｉｄｅ

飛来してきたバットほどの太さがある針を避ける。敵が出たのに気付いたのか商店街で買い物や談話に夢中になっていた市民たちは顔を青ざめさせ、誰かが悲鳴をあげた瞬間に散り散りに逃げ出した。首根っこ掴んで引っ張った友人は急な事態に追い付けていないのか母音を微かに発しながら尻餅をついて震えている。まぁ、無理もないよね。僕もそうだったし。

けれど今は一刻も早く此所を離れなければいけない。物怖じして震えていても捕まってしまうか最悪殺される。

というかまさか此処で来るのか！結局巻き込まれちゃってるじゃん！しかも原作にはなかった人質が既にいるんですけどぉ!!

内心ギャン泣きしながら次々と飛来してくる針を爆破で防ぐが、背後の友人を守りながらはキツかった。ので早く逃げてもらおうと声を掛ける。ここは危ないから早く逃げて、と。

「何ぼさっとしてやがる!!さっさと行けや!!そこ居られても邪魔だくそ!!」

何故だか超絶口悪くなってる。なんでや。

いきなりキャラ変わったかのように超絶罵倒された友人は、膝を震わせながら這々の体で逃げていった。よしよし、これでいい。……友人無くしてボッチ確定だけど。

「いいなぁ、お前。その〝個性〟!!コイツよりもよっぽどいい隠れ蓑じゃねぇかよぉ!?」

「黙れやクソカス!!んでもってさっさと死ね!!」

自然罵倒マウスと化した口とはこれ如何に。

口調とは裏腹に頭のなかは冷静でＢＯＯＯＯＯＭ!!!と爆破を食らわせるが、相手は流動体の上に人質持ち。迂闊に爆破を食らわせていれば人質が怪我をおう可能性は十分にあり得た。圧倒的に此方が

不利な状況では、他のヒーローたちが来てくれるのを待つしかないがそれでもこのヘドロに有利な個性を持ったヒーローはいなかった筈だ。なら、ヒーローたちを待っているのではなく僕がやらなければ。

そう思考を巡らせていたらヘドロが何か言ってきた。

「お前、逃げねぇってことはコイツ助ける気なのかぁ？ヒーローでもねぇのに」

「うるせぇ！てめぇのその面見てっとムカつくんだよ!!」

「はっはぁ！口の減らねぇガキだなぁ!!分かってんだろ。お前は今の俺に勝てねぇってことぐらいよぉ!!」

グゥ、と思わず喉を鳴らした。確かに彼奴の言うとおり。人質を取られている限り僕は勝てない。

「取引といこうじゃねぇか？コイツを離す代わりにテメェが人質になる。なぁに苦しくねぇよ。たった４５秒程息が出来なくなるってだけだ！意識手放した身体をくれりゃそれでいい!!コイツを救いてぇんだろぉ?!」

「いいぜ、ノってやる。その取引に」

間髪いれずの返答に驚いたのか目を丸くしたヘドロは、次の瞬間にはまたニヤついた笑みを浮かべていた。

人質を離した瞬間、それが攻撃のチャンスだ。向こうもそれは分かっている筈だから警戒している。

原作を思い浮かべるに、彼奴の個性は流動体になれるだけで力は平均ちょい上しかない。だから原作では暴れまわった爆豪君を押さえ付けるのに必死だった。暴れる人を押さえ付けるのは一人が限界なのだ。そこを突くしかない。

近くに歩み寄って彼奴の目の前に立つ。弧を描いた口元はそのままにヘドロを此方に伸ばしてくるのに比例して人質を包み拘束していたヘドロは除けていくのが見えた。あと、もう少し。

……今っ!!

ヘドロの大半が人質から離れた瞬間、僕は下げていた腕を頭上に上げて手を合わせる。

「スタン（閃）・グレネード（光弾）!!!!!」

「ぎ、ぃぁあああ!!???」

両手の狭間で小規模な爆破が起きて光が明滅し、やがてその光とそれに伴う高音はあっという間に大きくなって辺りを包む。

眼前で発動させたから最悪失明の可能性もあるだろう。それに頭に響く高音も中々取れないだろう。今の内だ。

発動させる前に大方の位置は掴んでおいたからすぐに分かった。

指先に触れた布地を引っ掴んで自分の方へ寄せると同時に商店街出入り口の方へと全速力で駆け出す。本当は爆走ターボで行きたいが意識がない人がいる以上それは出来なかった。

白光が晴れたのか瞼の向こう側が少し暗くなるのを感知して恐る恐る開くが走るスピードは緩めない。こういう時ほど運動神経高くてよかったなぁとつくづく思う。

「待てやクソガキィ!!」

どぅぇぇぇぇぇぇ!!?復活はやっ!!流石に眼前で手翳したから反応も早かったのか!?

怒声を背中に浴びながら尚も振り返らずにひた走った。振り向いてる暇なんてないない。

重苦しい悪意がすぐ後ろに迫ってきているのを感じ取って、咄嗟に抱えていた人を投げたと同時、手足を拘束された。

「チ、……!」

「こっっの、ガキィ!!やっと捕まえたぞ!!!」

「っん、〜〜〜〜〜むぐ、んんんん”ぅ!!!!!(離せこの変態くそヘドロ!!!死ね!!うっぇぇぇ気持ちわりぃ!!!死ね”クソカス死ね!!!)」

これ以上ないほどの罵詈雑言だ。自分でも若干引くほどの言葉ばかりだ。超絶罵倒マウス進化しすぎでしょ。

手足からの拘束は徐々にキツくなっていくと感じるのは僕の力が入っていないからだろうか。酸素が薄くなって呼吸も浅くなっていく中で出来うる限り最大の力でもがいて爆破しても、更に苦しくなっていくだけだった。

キツい、苦しい、という至極単純な単語の羅列が頭を埋め尽くし

ていくけれどそれで意識を手放したらダメだ。纏わり付いてくるヘドロを振り切るように顔を反らしても意味はなく。
「――――中学生が人質に!!」
「――――有利な個性持ちが居ねぇ！このままじゃ、」
「――――『ダメだ』!!これ解決できんのはこの場に居ねぇぞ!!」
聞こえてくる野次馬どもの声。謗念に包まれたヒーローたちの声。
いつもなら何とも思わなかったその声は、今はとても頭に響いて心に重い石を積み上げていく。
苦しい、つらい、苦しい。くるしい!!
それでも意識を手放すなと本能が五月蝿く訴えるから切れそうな意識の糸を必死に繋ぎ止める。意識が朦朧としているからなのか聴覚が鋭くなっては色々な音を拾っていく。
原作知識があるからと調子に乗っていたのかもしれない。もう少し慎重な考えをしていれば何か変わったのではないかという後悔の念は、馴染みのある声で掻き消された。
「かっちゃん……!!!」
「いず、く……っ?!な、……で！」
遠目に見える深緑の癖っ毛はどんどん此方へ近付いてくる。その後ろで、焦ったように手を伸ばしたヒーローが見えた。
「馬鹿が!!自殺行為かぁ?!!」
嘲笑うヘドロの目玉に向かって出久君は背負っていた鞄を投げ付ける。見事に命中したのか悲鳴をあげたヘドロの拘束が大分緩んで、咄嗟に酸素を吸い込むも、辺り一面火が燻っていて苦しかったが意識は先よりも大分はっきりとしてきた。
咳き込みながら眼前でヘドロを掻き分ける幼馴染みは、恐怖にか涙を目の縁に溜めながら震えていた。
「げほっ、かは、っはぁ、逃げろ!!出久!!何で来た!!」
「だって、かっちゃんが、！体が、勝手に!!……どうしてって、分かんないけど!!」
甦るのは、原作での台詞。彼は、この後――――。

「――――苦しんでる幼馴染みを、放っておける訳ないだろ!!!」
「――――……!!!」
恐いだろうに、口元を歪ませながら型どった笑みは大層歪で、でも、これ以上無いほどに僕の心を勇気づけた。
「もう少しなんだから、邪魔すんじゃねぇクソガキがぁ!!!」
憤怒に満ちた敵の声が、鼓膜に響く。眼前の幼馴染みは、顔を青ざめさせる。
「うるせぇ」
たった一言。それは、自分でも驚くくらいに激情を押し込んだような冷たくて苛烈な音を宿していた。
口角が上がる。眦を上げて背後の敵を睨み付けた。瞳が燃えるようだ。掌も、汗腺も熱い。それでも〝それだけ〟だ。
腹の底からマグマが噴出したみたいに身体中が熱かった。
〝拘束されていた〟腕を力任せに抜いてその反動のままに、ヘドロ野郎の目玉へと容赦なく爆破を食らわせる。
ＢＯＯＯＯＯＭ!!!!
「ぎゃぁぁぁぁぁぁ!!!???」
痛みで身を引いたヘドロ野郎は尻餅をついて悲鳴を上げた。拘束から解かれた手足を動かして背後の敵を振り返った。掌で爆発が起こる。目の奥が熱い。
「――――デトロイト……!!!」
……追撃のために振りかざそうとした右腕は、がしり、と大きな手に掴まれた。
「スマァァァァァッシュ!!!!」
後ろから吹く強風はヘドロを跡形もなく吹き飛ばし、発生した上昇気流で水滴が空からポツポツと降ってくる。
観衆たちの歓声が商店街に響くなかで、ヘドロ事件は幕を閉じた。

＊＊＊

事件解決後、どこかぼんやりとした思考の中で、確かこの後はヒーローたちにサイドキック云々言われたのだったかと思い立ってさっさとその場を後にすることにした。勿論、オールマイトと出久君にはお礼を言った。何だったら後日改めて菓子折りも持っていくべきだろうか。そう考えて立ち去ろうとした瞬間、幼馴染みに呼び掛けられた。

「か、かっちゃん……その……」

「……？」

「怪我、その腕、大丈夫……？」

その問い掛けに自分の両腕を見下ろすと、右腕の部分が赤く染まって黒の制服から覗く白シャツにも赤い染みが出来ていた。結構重傷じゃないですかやだー。てかこの出血量で痛み感じてないってヤバイね。でもこれ以上帰り遅くなるのもアレだし、治療は家でやろう。うん。

一人そう納得して、大丈夫だと伝えると不服そうな顔をしながらもそれ以上深い追求はせずに「そ、そう？じゃあまたね、かっちゃん」と別れの挨拶をして各々帰宅した。

途中、帰路に着きながら今頃オールマイトに弟子認定されたかなと思ってちょっとばかし名シーンを逃したことに落ち込んだ。いや、まぁ、ストーカーみたいなことしないけどさ。